

ライブハウス PEPPERLAND は、五十周年という節目を通過した。

PEPPERLAND を立ち上げた当初、同じような役割を果たす場はほとんどなかつた。設立時から目指したのは、単なる娯楽や消費の場ではなく、社会に働きかける場としてのライブハウスである。店主と客、あるいは客同士の馴れ合いによって形成されるヘドニズム (Hedonism) に基づく運営には価値を見出さなかつた。そこに社会を変える力は宿らないからだ。音が鳴り、人が集まり、感情が高まる。その力を、快樂や身内の結束だけに使い切つてしまえば、場はすぐに閉じていく。

ここで言う「アウト・オブ・ヘドニズム」とは、快樂を否定することではない。むしろ快樂が、内輪の承認や依存関係へと沈み込む瞬間を共にしながら、そこから外へ抜け出すための姿勢である。誰が来ても理由を説明できる運営、外部が入り込める余白、批判や異議が残る仕組み。それらを手放さないことが、店の最低限の倫理だと考えた。

いま、思想や哲学、社会の共通価値観（民主主義／共産主義）すらも綻び、言葉は容易に馴れ合いと惰性へ回収される。大衆の抱く「実感」や「常識」こそが、結局のところ社会の基盤であり、感覚は自覚なき大衆肯定主義（＝ポピュリズム※文末参照）の時代に巻き込まれ、矛盾さえ無意識に“整えて”しまう同調圧力が日常を襲う。正しさの表明だけでは、現実は動かない時代にさしかかっている。だからこそ、社会に立ち向かう道はポピュリズムをてこに「実践」から始める他はない。

「面倒見のいい店主が、気に入った客の面倒を見る」という関係は、一見すると温かい。しかしそれは閉じた関係性の中でしか成り立たず、再現性に乏しい。そのため社会全体に普遍化できるものではない。もちろん、馴れ合いの店の良さを否定するものではない。そもそも地域に根差した文化の一形態である。しかし PEPPERLAND は、「表現」と「実践」から始める他はない。

真摯に向き合う場所であり続けようとしてきた。単なる心地よさや共感に絡め取られない、開かれた批評性と創造性を日々の営みの中で支える場であろうとした。本書『能勢伊勢雄入門』で語ったのは、その一点である。

社会彫刻としての「店」

個人商店が集まる商店街に、資本主義の「外部」や「抵抗の拠点」としての可能性を見出すのは楽観的すぎる。なじみの店主と親しくなったからといって社会が変わるわけではなく、共感を媒介とした関係性は排他性や息苦しさを生むことがある。その構造は、SNS 上で「いいね」によって形成される擬似公共圏にも似ている。親密さが濃くなるほど、異物は排除され、異議申し立ては沈黙させられる。

現代に必要なのは、「実践」を通じて社会的に共有された意思決定と、それを支える〈コモンズ〉と〈ガバナンス〉であるが、自治なき共同体に、経済原理に縛られた構造を超える力は宿らない。商店街という制度の成り立ちそのものが、社会的包摶のモデルとしては限界を抱えているのだ。「革命」を実行しようと商店街が集まることはない。ここに「商店街」、さらには「街」が直面する課題がある。

ネットの世界でも同様のことが生じている。Web 2.0 が夢見た「グローバル・ビレッジ」も、現実には承認交換の場と化し、社会変革ではなく、インフレーション化した正義漢の他者批判を增幅しているだけの貧しい世界だ。言葉では否定しながら、身体は無意識に“自己修正”して現状を肯定してしまった時代に突入している。そこで必要なのは、理念の唱和ではなく、衝突を扱い、暫定的に合意し直すための作法を、現場で編み直すことに尽きる。手続きだけが残り、実質が痩せる〈ガバナンス〉へ流されないためにも、場は、あくまでも具体的でなければならぬ。

こうした状況下において PEPPERLAND は、「店」の軒先から乱を起こした大塩平八郎や、「めしや」で世の建て替

え立て直しを説いた飯屋三郎助に「店」の原型を見出し、自らの営みを社会彫刻として捉えてきた。ここでは、詳細は述べないが、PEPPERLANDは家族経営を重視している。日本の将来は道州制経済圏の強さと、個人経営の柔軟さの中にもしか求められないとしているからだ。ヨーゼフ・ボイスの「社会彫刻 (Soziale Plastik)」とは、すべての人間が創造的 existence であり、その創造性によって社会そのものを形づくるという思想である。表現とは作品に限らず、対話や教育、制度設計、日常のふるまいを含む社会的プロセスそのものである。PEPPERLANDは「店」というかたちでこの発想を「実践」し、音楽、美術、演劇、映画、批評、思想といった異なる領域を交差させながら、表現を通じて社会に作用しようとしてきた。出演者と観客、プロとアマ、地元と外部といった境界が、夜ごとに搅拌される。そこでは「見る／見られる」だけでなく、場を支えること自体が表現となりうる。ブッキング、機材セッティング、トラブル対応…。どれも些末に見えるが、ここでの判断は、即断を要する。理念は後追いでいい。まず現場が教えてくれる。その積み重ねによって店の倫理が生まれる。

「アウト・オブ・民藝」と「アルカイック・モダニズム」

二〇一二年、岡山のcafe moyauで開催された公開取材イベント「QONVERSATIONS TRIP OKAYAMA」で軸原ヨウスケ氏と出会い、のちに二〇一二～二三年のトークイベント「能勢伊勢雄と岡山」へとつながった。軸原氏の掲げる「アウト・オブ・民藝」は、制度化された枠組みに収められた民藝を外部から開放し、コレクティブな実践として再構築しようとする試みである。軸原氏の活動は、サルトルが指摘した実践的惰性態 (habitus) の連鎖を断ち切り、矛盾と対話、逸脱と再構築のプロセスとしてのコレクティブを形成する。それは、ジャンルや立場の境界を搅拌し、「参加」そのものを表現へと転じるPEPPERLANDの運用と響き合い、二〇二三年にPEPPERLANDが打ち出したモリス・バーマンの「アルカイック・モダニズム」とも接続する。それは、歴史を保持しながら進化するという姿勢である。

PEPPERLANDにとってそれは教義ではない。思想や哲学、共通価値観が機能しなくなり、生活感覚が自覚なき大衆肯定主義へ傾く時代に、社会に立ち向かう道は結局のところ「実践」しかない。その実践を、店という形で積み重ねてきたのがPEPPERLANDである。

感謝を込めて

『能勢伊勢雄入門』の出版に際し、軸原ヨウスケ氏をはじめ多くの方々の協力を得た。本書は記憶に基づく記述であり、プロの校閲を経て慎重にまとめた。誤りがあつたとしても、それは体験に基づく解釈の違いとして受け取つていただければ幸いである。校閲を担当してくださったのは、PEPPERLANDの元スタッフであり大手出版社の編集者として活躍した瀬尾健氏、通読校正をしていただいた「スペクティター」編集者の赤田祐一氏、写真家集団 *Phenomena* の森美樹氏、岡茂毅氏、木村匡孝氏、そして「スペクタクル能勢伊勢雄 1968～2004」展図録編集を手がけた伊吹圭弘氏である。校訂と流通でお世話になつた瀧亮子氏、「不適切発言」のチェックに尽力してくれた村岡充氏、成田海波氏にも厚く御礼申し上げる。さらに本書のイベントに関わつてくださつたすべてのスタッフと参加者の方々に、心からの感謝を伝えたい。また、推薦文を寄せてくださつたDOMMUNEの宇川直宏氏、赤田祐一氏には感謝しかない。最後に、これまでPEPPERLANDを支えてくれた数多くのスタッフの皆さん、能勢慶子・遊神・聖紅、そして名を挙げきれない無数の人々がこの五十一年を支えてくれたことに、心より感謝する。

※「大衆肯定主義」は、哲学者・須原一秀（六十五歳で自死）が用いた概念装置である。ボップカルチャーを直接の主題とはしなかつたが、現代社会を捉える枠組みを立ち上げるために使用され、その問題意識はマーク・フィッシャーにも近い。